ポローニア
paulownia

筑波大学附属学校教育局
広報誌 ポローニア

令和3年 6月30日 発行
通巻第51号

51

筑波大学
University of Tsukuba

【巻頭言】教育局教育長挨拶 溝上智惠子「新たなチャレンジを!」

2 ●コロナ禍2年目の教員免許状更新講習――梶山正明・濱本悟志
3 ●コロナ禍の修学旅行――丸山訓英
●国際バカロレア（IB）DP最終試験 ～5名がIBディプロマを取得――本弓康之
4 ●総合的な探求の時間 ～優秀研究発表会～――藤本和哉
●幼稚部ひなまつり会――桑原美和子
5 ●富浦校外学習――山口泰宏
●筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト――石飛了一
6 ●第46回 日本東洋医学系物理療法学会 開催――徳竹忠司
●のびのび走ろう! マラソン大会――髙井彩子
●六年生を送る子供会――大野 桂
7 ●新校舎完成プレセレモニー ～感謝の気持ちをそえて～――向山勝郎
●音楽科の教育 －その瞬間に－――町田健児
8 ●第16回「科学の芽」賞 募集要項

「歩く姿は百合の花」
徳留美海・藤倉咲綺

「光を集めて」半田柚稀

「深海での出会い」朝倉 湊

「NARITA」飯田都日

（表紙絵全て：附属聴覚特別支援学校 高等部専攻科造形芸術科 令和2年度卒業生）

巻頭言

新たなチャレンジを！

附属学校教育局 教育長 溝上智恵子

CHIEKO MIZOUE

2021年4月より附属学校教育局教育長になりました溝上智恵子です。この1年は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から、マスクの常時着用が普通となり、「黙食」や「三密」という言葉も日常的に使うようになりました。

私たちの多くは、こうした「新しい生活様式」で暮らすことにまだ戸惑いを感じていますが、一方でそれまでの個々人の「好み」とは無関係に、教育におけるICT化が進んだ1年でもありました。「子どもたちが登校できない」という必要に迫られたわけですが、学校教育において新たな局面が開けたのも確かです。

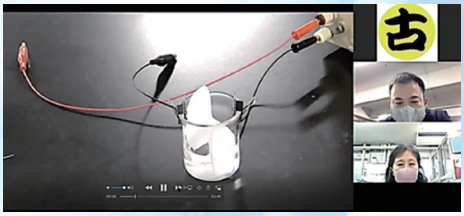
見方を変えると、このコロナ禍は、教育実験校としての国立大学附属学校だからこそあらゆることを試すチャンスなのかもしれません。筑波大学附属学校の長い歴史においてさまざまな試練に直面してきたはずですが、私たちの先人はそれを乗り越えて新たな伝統を作り上げてきました。今回も皆さんと一緒に、新たな教育の開発に取り組んでいきませんか。

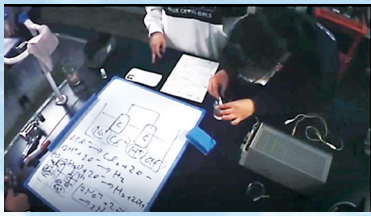
コロナ禍2年目の教員免許状更新講習

教員免許状更新講習「東京地区」実施委員会 梶山正明・濱本悟志

本学附属学校群のミッションの一つに、教師教育の推進があります。これは、次世代を担う幼児・児童・生徒の教育に留まらず、育成する側の教員の養成と現職教員への貢献を意味しています。そのなかで、従来からの教育実習、教員免許状更新講習、昨年度から始まった総合的な学習の時間の指導法は、対面式（オンサイト）を前提にしていただけに、COVID-19感染拡大で大きな変更を余儀なくされました。

特に、教員免許状更新講習は全国の教員を対象にするだけに社会的な責任が重く、附属学校群の教育実践をオンラインで如何に伝え、教育現場に役立てていただくかが大きな課題となりました。筑波大学の講習は従来から対面式を重視してきました。もちろん、対面式でしか効果が期待できない講習内容もありますが、今年度は多くの講習で計画の段階からオンライン講習を視野に入れ立案しました。表は、現場での教育活動を重視した、附属学校の教員が中心となって担当する講習一覧です。3回目の緊急事態宣言の影響で、6～7月はオンライン講習限定の実施となりましたが、8月以降も感染状況を見極めて実施する予定です。





2020年度「附属学校実践演習」オンライン講習の様子（於：附属高等学校）

表：附属学校群が担当する教員免許状更新講習

担当校（教員）	講習日	講座名（講習の区分 B・C・D）
全附属学校	6/19～12/4	附属学校実践演習（選択D・対面式のみの実施を含む）15講座
特別支援合同	8/20	幼稚園や小中学校等に在籍する気になる子への支援（選択B）
附属高等学校	7/4、8/21	楽しく学ぶやさしい天気予報活用術と防災・減災（選択C）
	8/19	オリンピックを題材とする体育理論の授業づくり（選択B）
		エクセルとフリーソフトRを用いたやさしい統計（選択B）
附属駒場中・高等学校	8/21	プログラミング教育の可能性（選択B）
	8/23	演劇の専門家とつくる教室（選択B）
		思考と議論を促す社会科・公民科の授業づくり（選択B）
附属視覚特別支援学校	8/17	学校教育に生かすリハビリテーションの理論と実際（選択C）
	8/18	視覚に障害のある児童・生徒への様々なサポート（選択B）
	8/19	見えにくさ・わかりにくさへの配慮って何だろう?（選択B）
	8/20	触って考える数学（選択B）
	11/13	授業のユニバーサルデザイン化を考える（選択B）

コロナ禍の修学旅行

附属視覚特別支援学校 教諭
丸山訓英

実際に手で触りからくりを解く体験をしました

筑波大学附属視覚特別支援学校（以下本校）中学部では、毎年5月に修学旅行を実施してきました。

令和2年度は、前年（令和元年）の11月の話し合いにより、3泊4日で広島方面を目的地として選び、その準備を始めていました。ところが、新型コロナウィルスの感染拡大の懸念から、直前になって日程や目的地など大幅に見直すことになりました。生徒にとっては中学生活の中で一度だけの旅行であることから、安全・安心を確保しながらの実現方法を検討し、令和3年3月に箱根・小田原方面へ1泊2日で旅行を実施しました。

旅行中は、学校で実施している対策に加え、不特定多数の人との接触を減らす対応など一つ一つの行動ごとに感染症対策を検討しました。

宿泊先では、生徒全員シングルルームに泊まり、ほかの人の部屋への移動や自動販売機の利用も禁止しました。安全対策に力を入れると、窮屈な生活となるため、生徒の部屋をオンライン会議システムで繋ぎ、フリートークをして、楽しく過ごす時間も作りました。

本校の修学旅行の特徴は、自分の手で触れ、地域の文化を体験する活動を取り入れていることです。今回の旅行では、箱根関所にある、寄せ木細工からくり美術館にご協力をいただき、座席や教室の確保など密にならない対策を取りながら、一人一人生徒全員が1つずつ箱根に伝わる寄せ木細工作りを自分の手で体験することができました。

感染対策をしながらの旅は不自由もあったと思いますが、生徒全員、真剣な表情で3年間の思い出を箱に詰め込むことができました。

黙々と箱作りにに取り組む生徒たち

国際バカロレア（IB）DP最終試験

～5名がIBディプロマを取得

附属坂戸高等学校 IB部主任 本弓康之

令和2年11月に行われた最終試験を受験し、附属坂戸高校IBコース第Ⅰ期生5名がディプロマを取得することができました。

IB教育は、生徒自身が世界の複雑さを理解し、未来へ責任ある行動をとるための態度とスキルの獲得を目指す国際的な教育プログラムです。附属坂戸高校は2017年にIB校として認定され、2018年4月にIBコース第Ⅰ期生が入学しその生徒達がこの春卒業しました。

2020年度は世界的なコロナ禍のため、オンライン授業や最終試験の試験内容・試験時間等の変更あったため、当初計画していたような最終試験に向けた取り組みには困難がありましたが、5名の生徒がディプロマを取得することができました。ディプロマを取得することができた生徒の一部は海外大学への進学（イギリス・ベルギー・オーストラリア等）を予定しています。

附属坂戸高校は、IBプログラムだけではなく、「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」拠点校として持続可能な国際社会を創る人材育成を今後も進めていきます。

総合的な探求の時間
～優秀研究発表会～

附属高等学校 三学年主任 藤本和哉

■総合的な探究の時間

二学年では「総合的な探究の時間」が週二時間（土曜日の三限・四限）に設定されており、個人やグループでそれぞれの研究テーマにそって課題解決型の研究を行いました。新型コロナ感染症の影響で、Zoom等を用いてオンラインで研究活動をスタートすることになりました。また、例年のようなフィールドワークが実施しにくかったものの、限られた範囲で各自が工夫を凝らしていました。二月二十七日に行われた優秀研究発表会では、外部講師や卒業生チューターからもコメントをいただきました。優秀研究のタイトルと概要は以下の通りです。

「変形菌のもつ高い教育的価値 ～人工環境における変形体形成の誘導～」（高山宙）

▶学習材に変形菌を用いることを提案し、その教育価値の考察、実現に必要な飼育時の環境条件の実験を行った。

「AIロボットJetBotはWROを攻略できるか？ ～AIロボットを「錯覚」させてみた」（辻知香葉）

▶AIロボットの可能性と限界の探究に向け、ロボコンの課題を基準に、AIロボットと従来型の比較を行った。

「今すぐ試せるドクダミなんとか」（今井理佐・奥村美賀子）

▶我が校にはびこるドクダミをなんとかしたい！という思いのもと、調査や食すなどの実践を経て有効活用法を考察した。

「環境に優しいシャンプーの販売を通じた、参画しやすいサステナブルアクションの仕組みづくり ～環境問題に対する女子中高生の意識改革～」（大坪里緒菜・加藤理璃子）

▶環境に配慮したシャンプーのプロデュースを通じ、誰もが気軽に環境保全に関われる仕組みの確立を目指した。

幼稚部ひなまつり会

附属聴覚特別支援学校 幼稚部主事 桑原美和子

3月3日桃の節句、ひなまつり。本校幼稚部では毎年この日にひなまつり会を行っています。1年生（3歳児）、2年生（4歳児）、3年生（5歳児）全員が着物を着て参加し、1年生が出し物を披露します。

1年生にとっては、初めての出し物の経験になります。入学したての頃は思い思いに行動して学校生活を楽しんでいた子供達が、1年間学校生活を送る中で、場の理解をしたり集団として行動したりすることができるようになり、毎年このひなまつり会では、生き雛になってその成長した姿を見せてくれます。

ひなまつり会の中では、司会の教員が、子供達の着物姿の紹介もします。慣れない着物を着ての動きに苦労しながらもどの子も嬉しそうでした。普段着る機会のほとんどない着物を実際に着る経験をすることで、動きにくさも含め、晴れの衣装を着る嬉しさや晴れがましさ等、様々なことを感じる機会にもなっています。

1年生の出し物は、会の最後に行われます。子供達はお雛様の衣装や道具を身につけ、音楽に合わせてゆっくり歩いて入場し、雛壇に並びました。どの子も初めは緊張した面持ちでしたが、皆から拍手を受け、面映ゆそうな、それでいて満足そうな表情でした。雛壇から降りた後には「うれしいひなまつり」の歌に合わせてお遊戯を披露しました。練習の成果を発揮したかわいらしい1年生に、大きな拍手が送られました。

富浦校外学習

附属中学校 令和2年度第1学年 担任長 山口泰宏

令和2（2020）年度は6月にようやく入学式が挙行され、その後も夏の臨海学校や林間学校、秋に延期した修学旅行までが次々に中止となった一年間でした。附属中の1年生は千葉県富浦における海浜生活を経験できませんでした。この海浜生活は明治後半に始まる附属中伝統の行事であり、中止されるのは戦中・戦後の混乱期以来のことでした。附属生が共通して大切にしている経験を、この学年の生徒たちだけに体験させてあげられなかったということは第1学年担任団にとっての痛恨の一事でありました。

そこで、3月24日。緊急事態宣言の解除を待って、1年生最後の行事として日帰りで富浦を訪れました。感染防止のために輪を作って外を向いて（背中を向けて！）、満開の桜の下で食べたお弁当は忘れがたい思い出となりました。春の海はまだ冷たく、手で触れるくらいしかできませんでしたが、「みんなと一緒に、できることをする」という姿勢を確かめ合う貴重な一日となりました。

筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト

附属大塚特別支援学校 高等部主事
石飛了一

附属大塚特別支援学校では、令和2年度スポーツ庁委託事業Special プロジェクト2020「特別支援学校等を活用した地域における障害者スポーツの拠点づくり事業」を受託し、「継続してスポーツ・身体活動を楽しむことができる拠点を作ること」、「生活の中にスポーツ活動を定着させ、余暇の満足度を高めること」を目的に『筑波大塚チャレンジスポーツプロジェクト（TOSCP）』に取り組みました。

TOSCPは、「大塚ランニングサークル」、「大塚ドッヂビークラブ」、「大塚卓球クラブ」という3つのクラブから成り立っています。活動内容は、種目の親しみやすさ・取り組みやすさ、今後の発展性、体力や運動スキルに関わらず楽しめることなどを考慮して選択しました。半年という短い間でしたが、小学部、中学部、高等部の在校生、卒業生、きょうだいが43名、地域のボランティアや保護者が47名、総勢90名が参加登録する一大プロジェクトになりました。緊急事態宣言下の2月にはオンライン教室を試行するなど、多くの方の知恵をお借りし、ご理解とご協力のもと、障害の有無に関わらず「安心・安全・楽しい」スポーツの場を共有することができました。

活動を通じて目にすることができた多くの笑顔、寄せられた感想から、スポーツの価値を改めて感じることができました。昨今、障害者スポーツをはじめ「スポーツの価値」「健康の価値」への注目は高まりを見せています。今後も持続可能な方法で安心・安全・楽しいスポーツの場を作っていきたいと思います。

第46回 日本東洋医学系物理療法学会 開催

理療科教員養成施設 講師
徳竹忠司

理療科教員養成施設の施設長であります、緒方昭広教授が学会長であります日本東洋医学系物理療法学会が今春に第46回の学術大会を開催いたしました。新型コロナウイルス感染対策としてonlineでの開催となりました。学会としては初めての経験となりました。

メインテーマを「軟部組織障害に対する鍼灸手技療法の最前線 ―肩関節周囲炎の臨床とスポーツ障害予防研究、最近の進歩―」とし、教育講演・シンポジウム・一般演題・特別講演を2日間で行いました。全ての講演データを事前収録とし、シンポジウムの討論部分のみ、参加者からの質問を含めたライブとし、開催後にはオンデマンドでの配信も行いました。

配信の機器の配置と演題の発表映像

シンポジウム 討論会風景

のびのび走ろう! マラソン大会

附属久里浜特別支援学校 教諭
高井彩子

2月、小学部でマラソン大会を行いました。感染症対策を行った上で、1･2年生、3･4年生、5･6年生の3つのグループに分かれて、それぞれコースを周回しました。練習では、「1位になりたい!」と意気込んだり、自分のペースで心地よさそうに走り続けたりする姿が見られ、それぞれにマラソンに取り組む目標や、意味などを感じて取り組んでいるようでした。

当日は、風は強いものの晴天に恵まれました。保護者や、本校の隣にある国立特別支援教育総合研究所の職員の方々の温かい声援を受けて、子供たちは自分の力を十分に発揮し、ゴールまで走り切ることができました。最後には、表彰式を行い、上位3位の子供たちにはメダルが贈られました。

六年生を送る子供会

附属小学校 教諭
大野 桂

5年生から募った24人の「卒業生を送る子供会」の実行委員に、最初の企画会議で、「実施には3密という制約がある」と伝えた。私は、「仕方ないが規模を縮小しよう」と実行委員達は判断すると思っていた。ところがそれとは真逆で、制約があっても「例年以上に盛り上げることはできるはずだ」と、凝り固まった大人の頭では思いもつかない、「3密」を避けても盛り上がる、想像力豊かな企画を次々と立ち上げていった。3密を避けるための「学校全体を子ども会の会場」とした入場方法の工夫や、Zoomを用いた突撃ロケ形式のインタビューや出し物の配信など、全校児童は集まっていないが、あたかも集まって卒業生をお祝いしている感覚に浸れる会となった。今回のことで、「コロナ禍だからこその子どもの育ちがある」ことを子ども達から教わった。子ども達には本当に感謝である。

新校舎完成プレセレモニー
～感謝の気持ちをそえて～

附属桐が丘特別支援学校 教諭 向山勝郎

例年よりほぼ1週間遅れの4月14日入学式・始業式で新年度がスタートしました。新しい1年への期待に満ちた気持ちもまだ冷めやらぬ15日、前日の雨がうそのような快晴のもと、児童生徒と職員でささやかな新校舎プレセレモニーを行いました。

新型コロナウイルス感染症予防のため、代表生徒のみが校舎正面に集合し、全校児童生徒は教室からオンラインで参加しました。

全校の児童生徒も見守る中、小学部6年生代表児童と校長先生がテープカットをしました。続いて、生徒代表として、中学部生徒会長が、旧校舎での思い出を、高等部生徒会長が、新校舎に寄せる思いをスピーチしました。このセレモニーでは、御来賓をお迎えすることはできませんでしたが、筑波大学の施設課のみなさまから、「附属学校としての誇りをもって、楽しく思い出に残る学校生活を送ってほしい。」というメッセージをいただきました。また、当校前副校長で、現在は附属久里浜特別支援学校長の西垣先生もオンラインで参加していただき、改築に至るまでの苦労やたくさんの方々が関わってくださったことなどをお話してくださいました。

今回の改築に関わってくださったみなさまへの感謝の気持ちをもって、新校舎を大切にし、たくさんの児童生徒とまた新たな学びの歴史を作っていきます。

高等部生徒会長スピーチ

中学部生徒会長スピーチ

音楽科の教育 ―その瞬間に―

附属駒場中・高等学校 教諭 町田健児

「瞬間」に音楽家として敏感なのでしょうか。そうでは無いのです。

音は引き返せない世界なので私はその瞬間を楽しむ事、楽しめる事に拘っているように思います。その瞬間を楽しむには凝縮された世界を見る力が必要で、これを感性だと私は思っています。どんな事柄や物にも良い事、美しい事が潜んでいてそれらはミニマムな存在でその瞬間を静かに通り過ぎていきます。駒場の音楽授業ではそれらを見出せる力を養い発信していく事を目標としています。「瞬間」に思いを馳せるのは音楽家というよりは小さな頃より茶道が私の身近にあった影響です。

サモトラケのニケは様式も時代も違うダリュ階段踊り場の空気を支配する強い力を秘めています。残念ながら私が着任してからは一度も開催されていませんが駒場の音楽祭にも同じような力を感じるのです。見えない力、芸術の力とでも言うのでしょうか。可視化され物言う訳で無いその力はあの像にそして生徒達の思いに凝縮され多くの人々の心に感性に訴え掛けてきます。

その瞬間を楽しむ力はより良く生きる為の力、人生を謳歌する為の力とも言えます。音楽という枠を超え芸術の根源的な力を探求する意味を私の姿勢を通して一瞬の悔いも無く駒場の生徒達に見せていきたいと思っています。私の性格上サモトラケのニケのように黙ってはいられないのですが…

第16回「科学の芽」賞

問 https://www.tsukuba.ac.jp/community/students-kagakunome/

●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia（後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む）こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名（Paulownia imperialis）に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア paulownia vol.51

発行日……令和3(2021)年6月30日
発行者……附属学校教育局教育長 溝上智恵子
発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌 広報戦略推進委員会
〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800
デザイン……スピーチ・バルーン
印　刷……広研印刷　使用紙：U-ltimax［日本製紙］